
神のいたずら

クウロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神のいたずら

【Nコード】

N7371U

【作者名】

クウロ

【あらすじ】

ちよつとオタクで運動神経抜群のの高校生、大武 真がある日、弱気な転校生、礼条 優に出会った事でちよつと変わった学校生活が始まる。

一話 出会い（前書き）

どうもクウロです。今書いている小説の更新が早くないので、友達のリクエストに答えて、書いていた恋愛ものの小説を載せます。こちらの方が更新早いです。

一話 出会い

新入生の面倒をみたり、体力テストやなんやら終わらせて、春の忙しさが落ち着き、少し暑くなってきた。その日はいつも通り、十八歳の高校生としての朝。学校の準備を済ませ、食事をし、家を出た。

「うーん！いい天気だ。本当、これから遅刻しそうなのを忘れそうなぐらい。」

この日、少し大袈裟かもしれないがたまたま寝坊したことが俺の人生を変えるとは思ってもみなかった。

く神のいたずらく

本当に時間がヤバイ。ギリギリ間に合わない時間だ。急がないと走れば間に合うか？少し遅めに走るか。事故とかにあったら大変だしな。

俺が行っている高校は家から歩いて二十分ほどだ。

いつもは寝坊しないんだが三年生になってから就職活動やらなんやらで大変だったから疲れがたまっていたのか？それとも夜遅くまでガン〇ム見てたのが悪かったのか？でも、いつもちゃんと起きられたしなあ。ま、考えても仕方ないな。

ちょうど曲がり角あたりで向こう側から来た人とぶつかってしまった。

「きゃっ！」

「おっと。」

相手も急いでたようで全力で走ってきたようだった。

ぶつかった相手は女の子でくりっとした目にきれいな茶髪のポニーテールが印象的だった。

「ご、ごめんなさい！新しい学校に遅刻しそうで…その…あの！」

「まあ、俺も注意しなかったのが悪いしな。それに体は鍛えてるからこれくらい気にしねえよ。それよりどこの高校いくんだよ。」

このあたりには俺の通うところ以外に高校はない。

「岬高校です……」

「俺もだ。あと道違うぞ。」

「え!？」

それを聞くなり、彼女はきょとんとする。

「本当…ですか？」

「嘘ついてどうするんだよ。」

「……………」

「急がないと遅刻するぞ。ていうかも遅刻だろうな。」

「あ！ごめんなさい！」

「いいから行こうぜ。つれてつてやるから。」

「はい……お願いします。」

しかし、新しい学校ねえ……

珍しいなこんな時期に転校生なんてな。

しばらくして学校に着いた。時間はもうすでに過ぎている。

「ほらここ。岬高校って書いてあるだろ。転校生ならいくらでも言い訳きくからさっさと職員室いったらどうだ？職員室は二階にあるから。」

「ありがとうございます。失礼します。さつきはすいませんでした。」

礼儀正しいな。さて、遅刻したからそれなりの罰は覚悟しますか。全く……

[illegible]

「はあ。疲れた。」

放課後に遅刻した罰として校内の掃除をした後、部活に行った。

「木村先生すいません！遅れました！」

「おう、お疲れ様。聞いたぞ。」

木村先生は顧問の先生で俺が所属しているのはテニス部だ。

「へ？聞いたって何をです。」

「今日遅刻してまで転校生連れてきてくれたんだろう？」

「まあ、はい。」

遅刻しそうになったのは転校生のせいじゃないんだが……
理由がわかってるんなら罰なしにしてほしかった。でもいっても罰は別だとかいってそうだな。

「大武がいなかったらあの子ずっと迷ってたかもしれないな。」

「それは大袈裟では…」

大武っていうのは俺の苗字だ。

「ところで大武、後輩の面倒をまた見てくれるか？」

「別に大丈夫ですけど……バイトありますし、少ししかできませんよ。」

俺の両親は五年前、事故で死んでいて、今は俺がバイトで稼いだお金で生活している。そのため、大会もとてもじゃないが出れない。

「少しでも大丈夫だ。おーい、礼条。こっち来てくれ！」

「はい。なんでしょうか？」

呼び出されたのは朝の会った転校生だった。

「よう、朝の子。また会ったな。」

「あつ、はい…」

「面倒をみてもらうのはこの子だ。みんな大会に向けて頑張っているし、先生方もいろいろ忙しいんだ。悪いがこの子に学校を案内してくれないか？ 見ず知らずの生徒よりは朝あったお前の方がいいだろ。それにお前は人望もある。頼めるか？」

まあ、俺は大会出れないしな。これくらい部活に貢献しないとな。

「まあ、その子が良ければ。」

「お、お願いします。」

「決まりだな。頼んだぞ。」

というと先生はテニスコートに戻っていった。

「じゃあ、行くとしますか。まず自己紹介しないとな。俺は大武真だ。よろしく。」

「れ、礼条 優です。よろしくお願いします。」

「よし。礼条さんね。じゃ、先に校内案内するからついてきて。」

「はい。わかりました。」

それが彼女との初めてのつながりだった。その時俺は、高校三年だし、彼女が転校生だから学校案内と少し話をする程度で付き合いは終わると思っていた。

一話 出会い（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。

二話 帰り道

――――

最初に案内したのはそれぞれの教室。それから三階の特別教室、二階の特別教室、一階の特別教室を案内して、武道館、体育館を案内した。

「ざっとこんなもんだな。あとはさっき礼条さんがいたテニスコート。あとは体育倉庫ぐらいだな。体育倉庫は別に案内する必要はないな。」

「はい。大丈夫です。」

「で。部活はなにやるんだ？」

「あ、テニスです。さっき入部届けのプリントもらってきたんです。」

それでテニスコートいたのか。さて、そろそろバイト行かないとな。

「俺、バイト行く時間だから帰るぞ。」

「あ、はい。今日はありがとうございました。」

「まあ、いいさ。あ、そうだ。」

俺はメモを取り出し、彼女に渡した。

「それ、俺の携帯の番号とアドレス。何かに困ったら連絡してくれ。俺にできることならやってやるから。じゃ、またな。」

「ありがとうございます。さようなら。」

さて、バイト、バイト♪

・・・・・・・・・・・・・・・・

バイトも終わり帰り道のことだった。すっかりあたりは暗くなり、今歩いてる道にはあまり人がいない。

もともとこの道。あまり車が通らないし、人気もないからヤクザとか不良とかそういうおかしい奴等がいるんだよなあ。ま、俺は近道だし、絡まれたりしないから大丈夫だな。

「君可愛いじゃん。俺達と遊ばない？」

おいおい。今何時だと思ってやがる。

「わ、私急いでるんで…」

ん？この声どこかで聞いたような……駄目だ。暗くてよく見えん。

「そんなこと言わずにさあ。」

「頼むよ。」

こいつらを不良AとBと呼ぶか。それにしてもAもBもしつこそうだな。

「こ、困ります……」

お、見えてきた見えてきた。そうだ。聞いたことある声だと思ったら礼条さんじゃねえか。このあたりの事まだ知らないんだな。

「直ぐに済むから、ね。」

しつこい奴だな。そんなだと嫌われるぞ。

あ、嫌われてるからナンパしてるんか。

「や、やめてください……」

朝も思っただがよっぽど気が弱い子なんだろう。震えながら小さい声で反論する。

多分なにいつても無駄だと思うが……

「おお。可愛い！ますます気に入ったぜ。大丈夫だよ、本当にすぐに帰すから」

ほらな。逆効果。結局、相手側の答えなんか聞いてないんだよこいうしつこい奴等はな。

不良どもがその子の腕を掴み、力強くで連れていこうとし始めた。

「誰か…助…けて」

両者同意ならまだしも嫌がっている奴を無理やり連れていこうと

するなら許せないな……

それに一応俺の後輩でもあるわけだし。

「少し話すだけでいいから……ってギヤアア」

連れていこうと彼女の腕をつかんでいた不良Aの肩を掴み、爪を食い込ませる。

「てめえ！」

「人の後輩に手えだしてんじゃねえよ。」

Bが殴りかかるが、Aをなげてつけて転んだところを二人の上に座り込んだ。

「ぐえっ！お、重い……早くどけよ！」

「それはこっちのせり」「ハイハイ。黙ろうか。」ギヤアア！」

「ふう、全く。礼条さん。怪我不いか？」

「は、はい。大丈夫です。」

「そうか。ここら辺は危ないから来るのやめとけよ。さ、帰るぞ。」

「あの…その人達は…」

「ああ、こいつら？いいんだよ。ほつといて。ここはそういう場所なんだから。」

こんな所、ケンカはしょっちゅうだし、気絶する奴なんてよくあ

ることだ。

それにしても近道してきて良かった。相手が俺より年下だからと
いっても礼条さんじゃ太刀打ちていうか抵抗できないだろ。

さて、こいつらが不良集団の一員だったらめんどくさいから早く
礼条さん連れて帰るか。

なんだっけ？最近出来た不良集団。たしか、グリフォンとかいっ
たっけ。情けない奴等だよな、まだアニメとかマンガのごっこ遊び
みたいなことやって。

「あの……後ろ……」

「は？」

後ろを振り向くと目付きが悪いロン毛の男がいた。

「何が『ごっこ遊び』だって？うちの部下を随分痛め付けたようだ
けど。」

遅かったか。ていうか痛め付けたっていうほどやってないし。

「あれ？なんで俺が思ってたことが「思い切り声だしてたぞ。ふざ
けてんのかてめえ。」

ロン毛が殴りかかるが右手で受ける。

「俺のストレートを受け止めるとはな。驚いた。だが受け止めた手
は無事かな。」

「ああ、ナックル・ダスターね。大丈夫だ。鍛えてるから。」

ナックル・ダスターてのはメリケン・サックて言えばわかるかな。手にはめてパンチの威力を上げるやつ。

「ほう。腕に自信がありそうだな。」

次はもう片方の腕で殴ってくる。手首を持ち、ひねって投げ飛ばした。

「ぐはっ。何が起こった。」

「ん？ なげただけど。」

倒れた相手をさらに投げた。相手が宙に舞っているうちに蹴り飛ばした。

「くっ！」

「あんまり手。出さないほうがいいぞ。俺、空手五段、柔道三段だから。」

それにこういう奴等見てるのムカつくんだよな。いつまでもふざけててまともに生きようとしらない奴。

「礼条さん。」

「……あ、はい！」

「いつまでも不良相手にしてらんないし、危ないから一緒に途中まで行ってやるよ。」

「はい。ありがとうございます。」

「ま、まで……」

「おお。まだ気絶してないのは感心するが、もう動けないだろうじゃあな。」

いやあ、最近なまったかな。前はもっと反応とか良かったんだけど。ま、別に平気だろ。

一応危なくない所まで来れたな。家が近いなら別れるか。

「家はどこだ？」

「あ、すぐそこです。あの青い屋根の家。」

ああ、たしかにあるな。青い屋根って、ここら辺の家で一軒しかないからわかりやすいな。

「じゃ、もう大丈夫だな。俺は行くぞ。」

なんか今日はいつもより大変だったな。

「あ、あの今日は…本当にありがとうございました。」

「別に気にしないでいいさ。あんまりここに来てから日がたってないんだろ？わからないことはどんどん聞いてくれ。じゃあな。」

「はい。さようなら。」

さて、帰ってガン〇ムの続きでも見ますか。

三話 二日目（前書き）

小説はなれてないので短い駄文なのは勘弁してください。

三話 二日目

ふああゝあ！

今日は朝練か。時間は5時半。余裕だな。やっぱり昨日はたまたま寝坊したんだな。

さて、準備済ませて学校行くか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

意外と早く着いた。まさか信号に一回も引っ掛からないとこんなにも早いとは。

まだ、誰もいなさそうだな。まあ、いいや。一人で練習すれば、つてあれ？もうすでに誰がいるな……誰だ？

テニスコートに入ると端の方で礼条さんがいた。

けっこう早起きだな。しかも凄い集中してる。一人じゃあまりいい練習出来ないだろう。他が来るまで相手してやるか。

「よっ！おはよう。」

「ひゃっ！」

「驚くところか？」

「……すいません。おはようございます。」

「まあ、いいや。せっかくだから打とうぜ。」

「でも、私あまりうまくないですよ。先輩にまた迷惑かけちゃいます。」

「別に迷惑とか思っていないし、大会も出れないから、後輩の為にや
つてやるよ。それともテニス嫌いなのか？」

「ち、違いますよ。」

「だよな。そんだけ早起きして来てるんだから。」

「ま、まあ、私は…癖ですから。そしたら先輩だって早起きじゃな
いですか。」

「今日はたまたまだ。たまたま。」

礼条さんの反対側に行き、ラケットを構える。

「サーブそっちからで良いぞ。」

「はい。」

礼条さんがサーブを放つ。コースがうまく狙えていてまあまあ速
度もあった。

「上手いじゃん。よっと。」

「先輩はなんでテニスやってるのですか？」

「なんとなく、だな。なんでだ？」

「昨日、空手五段と柔道が三段って言ってましたからなんでそっち
に入らなかったのだろうと思ったんです。」

「ああ、あれ。嘘に決まってんじゃない………いただきっ！」

ラリーを続けながら会話をし、俺がスマッシュを決めた。

「は、速い………」

「たしかに空手も柔道も出来るが、五段や三段の資格があるわけじゃない。それぐらいの実力があるって言われたことがあるだけだ。」

「そ、それでも………凄いですよ。今度は先輩からサーブをして下さい。」

「わかった。おらよっ！」

俺がサーブを出す。一番返しやすいがスピードが速かったため慌てて返してきた。

「あっ。」

「よっと！」

高く上がったボールをスマッシュで返した。

「また、負けました………」

「礼条さんは自信無さすぎだ。そんな弱腰で戦ったって負けるに決まってる。自分に自信をもとうぜ。」

「む、無理ですよ。今までだって………」

「そうか………」

礼条さんに向かって歩いていき、頭に手をのせて撫でてやった。
何故かおびえていたが…

「先、輩？」

「少しは自信を持てよ。俺がお前を信じてやるから。自分に自信が
持てる奴だってな。だから……頑張れ。」

「は、はい。」

「ところで何でさっき、何でおびえてたんだ？」

「前の学校の先輩に同じような事を言われて……
その先輩には怒られたので……その……」

引きずってるのか。そんなにいつまでも気にすることないのに。

「まあ、人それぞれだからな。礼条さんの場合、性格の事でも有り
そうだから無理に変わろうとしないで、ゆっくりやっていこうぜ。
まだ一年、礼条さんはあるんだからな。」

「ありがとうございます。優しいですね。」

礼条さんが泣きそうな顔になった。

「当たり前だろ。ほら、こんくらいで泣きそうな顔すんな。笑って
笑って。」

「はい。」

その後、他の部員が来たのでいつも通り朝練を始めた。

.....

朝練が終わり、いつも通りの授業に入った。

「一時間目から体育とかやる気でねえ。サボろうぜ真。」

「却下だ。お前の場合は全てにおいてやる気ないだろ。いいから早く着替えるぞ。」

俺に話し掛けてきたのは杉谷 忠。授業中は居眠り、遅刻はしょっちゅうする奴だ。

「そんなつれないこと言うなよ。あ、そういや転校生どうだった？男？女？女の子なら可愛いか？髪型何？」

「いっぺんに聞くな。お前の期待通り、女の子だぞ。それ以上は教えん。お前が襲いそうだから。」

「えー。」

「先、行くからな。」

「あ、待ってくれ！」

誰が待つかよ。

.....

体育の内容はサッカー。最後に男女合同で試合をすることになった。杉谷とは対戦チームだ。

「よおい、始めっ！」

専攻は相手から。

「みんな頑張れ。」

俺はキーパー。何もしなくて楽だな。最初だけだが。あつ、もうこっち来られた。

「大武！覚悟！」

手が届きにくいところにシュートされるがキャッチ。

「まだまだだな。吉沢。」

「ちっ！」

シュートしてきたのは吉沢 美咲。舌打ちとかしてるが女子でクラス委員長だ。

取ったボールを投げる。狙ったのは、杉谷の頭。狙った通りに当たった。

「イタッ！何しやがる！」

「さっきからぼーっとしてるからだ。」

「真！覚悟しやが「もらい！」あつ。」

「コラ！何取られてんだ杉谷！」

いやあ、愉快愉快。こんな感じで授業は過ぎていくのだった。

四話 午後

時間は変わって昼休み。

「なあ、教えてくれよう！」

「いつまで言ってるんだよ。駄目なもんは駄目だ。だいたい杉谷に教えたらロクでもないことするに決まってる。少なくとも今まではそうだった。」

「ケチ！」

「じゃあ、お前が期末テストで百点取ったらな。」

「さあて、弁当弁当。」

まったく、こいつは勉強のことになるといつもこうだ。購買でパン買ってきますか。

購買混んでんな。ま、買うのは人気ないやつだから、関係ないが。

「先輩。」

後ろを振り向くと黒髪のショートカットの女の子がいた。この子も礼条さんと同じ転校生で名を風見 由美という。去年転校してきた風見さんは、無口だが風見には彼氏がいる。

前はいろいろ問題児だったらしいが彼氏のおかげで更正したらしい。

「ん？どうした風見。ていうか篠宮は？」

篠宮は風見の彼氏の苗字だ。名前は龍治だ。

「龍治ならパン。買いにいつてます。」

「そうか。」

「先輩、転校生。どんな子ですか？」

「礼条さんの事か。少し弱気だけど礼儀正しいぞ。」

「そうですか。」

「ていうか同じ学年だし、風見の方が詳しいだろ。」

「私。友達、いませんから。」

「そうか……礼条さんに話し掛けたらどうだ？友達になってもらえるだろ。」

「そうですか。」

「おい。買ってきたぞ。あ、先輩こんにちは。」

「ういっす。」

「龍治、行こう。先輩、また後で。」

「お、おい。由美、いきなりどうしたんだよ。ちゃんと行くから、

引っ張るなよ。まったく。すみません先輩、また後で。」

「ああ、またな。」

風見は二人きりになりたいんだろ。ま、仲良さそうで良かった。あの二人いつも一緒にいるな。おっと、パン買わないとな。

焦った。残り一個だったぜ。いやあ、危ない危ない。

「あつ、先輩。こんにちは。」

「おう。礼条さん。なんでここに来たんだ？」

「ちょっとパンを買いに来たんです。お弁当を忘れたみたいなんですよ。」

……………俺が買ったので最後だったよな。

「売り切れたぞ。今さっき。」

「へっ!？」

弁当ないって結構大変だな。今日は本来部活がない日だけど大会近いから練習やることになってるぞ。

「……………俺のやるよ。」

「そんな、大丈夫ですよ。これくらい我慢できますから。」

そう言うがすぐにお腹が鳴った。

「体は正直だな。部活あるんだし、食べ。俺はバイト行くから途中で買っていける。」

「い、いいですって。」

「いいから食べ。何時間も空腹でいたいのか？」

「そ、それは……嫌ですけど……」

「だろ？ほらよ。」

礼条さんにパンを渡した。礼条さんは戸惑いながらも受け取る。

「迷惑ばかりかけてすいません。いただきます。」

「だから迷惑じゃないって。まだ二日目なんだからな。」

「でも先輩にばかり……すいません。」

「だから謝んなよ。好きでやってんだから、ほら食べろ。休み時間なくなるからな。」

「はい。」

礼条さんがパン食べ始める。買ったのはカレーパンだ。

「あ、このカレーパン。結構おいしいです。」

「結構本格的に作れてて、美味いから早めに買わないとすぐに売り

切れんだよ。人気ないパンでもな。」

「そうなんですか。そういえば先輩。」

「なんだ？」

「何で私をさん付けで呼んでるんですか？」

「最初から馴れ馴れしく呼び捨てにするのも気が引けるんだよ。呼び捨てにしているなら大丈夫ならするけど。」

「大丈夫ですよ。なんか先輩にさん付けされるの違和感あるんで。」

「そうか。じゃ、そうする。さて、そろそろ教室に戻るか。じゃ、俺今日いけないから、部活頑張れよ。」

元々部活がない日だからバイトの時間も早い。

「はい。」

さて、残りの授業がんばりますか。

五話 お邪魔します・・・

放課後、バイトも終わり、帰りの事だった。いつもの道を歩いていたら、不良集団に囲まれてしまった。おそらく、昨日の仕返しだろう。

「やれやれ、嘘なんかつくんじゃない。怯えて逃げるタイプじゃなくて相手が強いほど、食い付いてくるタイプか。」

「何をごちゃごちゃ言ってるんだ！ヤローども、やっちまえ！」

「「おおー！」」

「やっべ！逃げてやる！」

まあ、ただの一般人なのに大勢の不良から逃げ切れるはずがなく、追い込まれた。

「へっ！もう逃げ場はないぜ。覚悟しな。」

「はあ、はあ。ちよつとタンマ！疲れた。」

「構わねえ！やっちまえ！」

俺、終わったかもしれないな。おとなしくやられるつもりはないが、これだけの人数にどれだけ対応できるか…………

「はあ。仕方ない。やりますか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

不良達と戦い、勝ちはしたがいろいろ怪我をした。特に右腕は動かない。骨折したようだ。

「はあ……はあ……いてえ。まったく無理するんじゃない……なかった……な。行くか。」

近くにいい医者がある所を知ってる。

「ふあゝあっ！5時半か。バイトが早めに終わってよかったと思ったが、これじゃあな。」

しばらくして、診療所に着いた。『神田診療所』

先生の腕が良いのにあまり儲かってないのが不思議だ。

左手でドアを開ける。ここは未だに手動ドアだ。本人はこの診療所を建てる時、エコだと言ってわざわざ手動にしたらしい。

「神田先生いますか？」

静寂。今診療所には誰も居らず、中は薄暗かった。
いないのか……

「仕方ない。帰るか。」

「おや、どうしたのかね？私はここにいるが……」

「おわっ！神田先生！誰だって後ろから声かけられたらびっくり……ぐっ！」

「悪いね。どうやら右腕を怪我したみたいだね。見せてごらん。」

先生が右手を取り、確認をする。

「これはっ!」

いきなり先生の表情が厳しくなる。この人が厳しい顔をするということはもう二度と動かせないかも・・・

「な、何ですか?」

「……………骨折だね。2ヶ月ほどで治るから安心しなさい。」

「ですよね……………」

よかったー。

……………

「これでよしっ。骨折が治るまで三日に一回はここに来ること。わかったね?」

「はい。助かりました。」

「右腕以外の怪我は大したことないから大丈夫だ。じゃ、お大事に。」

「ありがとうございます。」

本当に神田先生は手際よくて助かる。痛くないし。さて、今は……っと6時か。右腕の事もあるし、コンビニの弁当で済ませるか。

「先…輩？」

声のした方を見ると礼条がいた。隣に五、六歳の女の子もいる。誰だろうか？

「おう。礼条、知り合ってから二日しかたっていないのに、よくこんなに会う確率が高いんだ。」

「それより先輩その右腕はどうしたんですか！？」

「ああ。ちよつとな。」

「ちよつと、って……………」

やっぱりちよつとには見えないよな。骨折だし。

「ねえ、お姉ちゃん。この人誰？」

「美幸。この人は私の先輩で大武 真先輩だよ。」

みゆき…………妹か。

「お姉ちゃん、先輩って何？」

「うーん…………美幸にとっては和樹みたいな人かな。」

「へえー。お兄ちゃんみたいな人なんだ。」

もしかして礼条って妹と弟一人ずついるのか。大変そうだな。

「なあ、そろそろ俺コンビニ行きたいんだけど。腹減ってるし…」

この右腕じゃ、まともに料理もできない。

「まさか夕食、コンビニのお弁当で済ませるかつもりなんですか？」

「まあ、こんな腕じゃあな。」

「お母さんかお父さんにやってもらえばいいじゃないですか。」

「……………とつくに死んだよ。五年前にな。」

「す、すいません！知らなくて……」

「わかってるさ。ちょっと今日は疲れてんだ。もういいかい？」

「なら、尚更コンビニ弁当じゃ駄目ですよ。ちゃんと栄養とらな
いと……」

そんなこと言われたってなあ。

「じゃあ、どうすりゃあいいんだよ。」

「家に来てください。先輩の分も作りますんで…
今日お母さんが出張でいないんですよ。お父さんも帰りが遅いです
し、大丈夫ですから。」

そりゃ、ありがたいが……

「えー！本当に？隠してない？」

「だから……」

楽しそう…だな。

「あ、そうだ。僕、礼条 和樹です。姉ちゃんがお世話になってます。」

「どうも。さっきれい…優さんが言ってた通り先輩の大武真だ。和樹君。」

「あ、呼び捨てで構いませんよ。」

「ねえねえ、ご飯まだ？」

「そうだった。美幸、ちょっと待ってて。今作るから。」

そう言うと礼条は台所に向かった。

五話 お邪魔します・・・（後書き）

お知らせ..

この小説は更新を停止することにいたしました。理由はあまりうまく書けないかなと思ったのとこれの他の二つの作品を優先しようと思ったからです。強さよりこだわりが大事ですの他にもう一つ近いうちに作品を投稿しようかと思っているのでよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7371u/>

神のいたずら

2011年11月13日17時50分発行